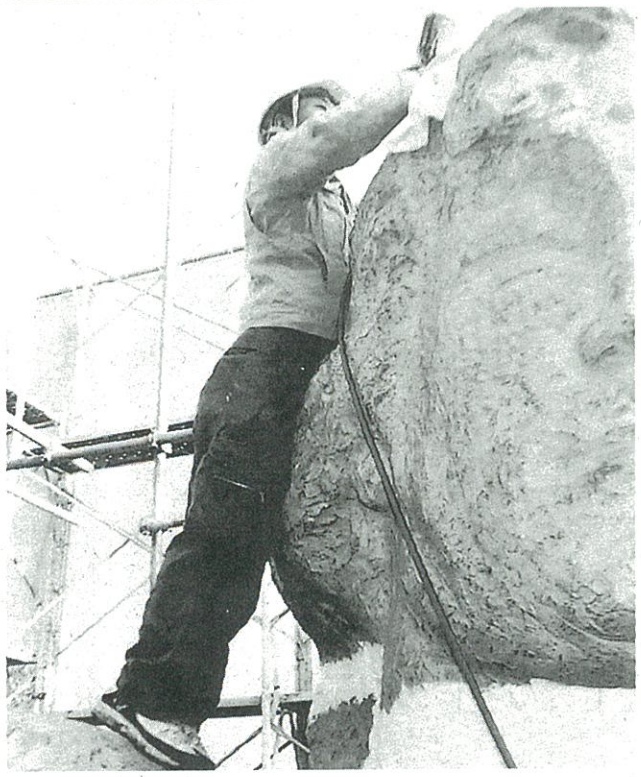
「ナガサキ」象徴 修復に高岡の技

平和祈念像 銅器職人・金森さん指導へ

長崎市の平和公園にある平和祈念像の表面の修復を、高岡銅器の職人たちが担うことになった。銅器の「着色」が専門で、20年前の像の修復にも携わった金森正則さん(70)も参加する。金森さんは「祈りを捧げる人たちの思いがこもった像。修復を手がけられるのは誇り」と話している。



1999年に始まった平和祈念像の修復で像の頭部を磨く金森正則さん＝長崎市の平和公園、竹中銅器提供

金森正則さん

平和祈念像は、原爆の犠牲者の鎮魂と核廃絶に向けたシンボルとして、彫刻家の故北村西望さん（1884～1987）が制作し、1955年に完成した。高さ9・7㍍の青銅製の男性座像で、天を指す右手は原爆の脅威を、水平に伸びる左手は平和を表している。

表面のひび割れなど老朽化が進んだため、99年から2000年にかけて、像を解体して修復を実施。高岡市の「竹中銅器」が長崎市から作業を委託され、同社の製品を手がけていた金森さんも、着色作業の指導役として参加した。

像の修復は、北村さんの助手として制作に携わった彫刻家の故富永直樹さん（1913～2006）が監修。着色は、表面の加工や塗装で、歳月を経たような色や風合いを銅器に与える作業だが、金森さんは富永さんから「建立時と寸分違わぬ色を」と求められた。塗料のサンプルを何色も作り、何度も塗り直して完成させた金森さんは「あの色は自分にしか出せないと自負している」という。

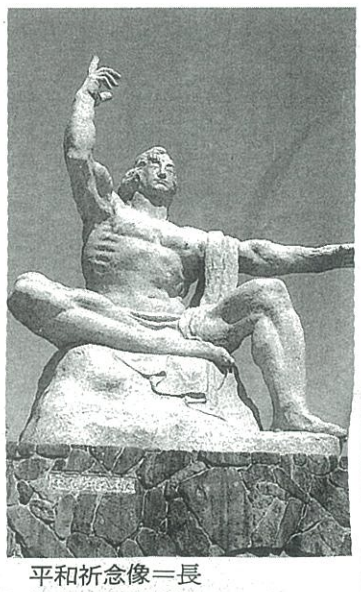
20年前も参加「建立時の色に」

修復から20年が経った像は、再び表面の樹脂コーティングが劣化。原爆投下から来年で75年を迎えるのを前に、長崎市が再び竹中銅器に修復を委託した。金森さんは、再び現地で職人らの指導役を担うことになった。今月末から像の周囲に足場を組み、着色を一からやり直す作業が始まる。完成は3月末の予定。

金森さんは、20年前の修復作業中、多くの市民が像に手を合わせ、花を捧げていたことを覚えているという。「建立した時と変わらない姿に戻すことが職人としての責任」と話す。

全国に認められる高い技術を誇る高岡の銅器産業だが、近年は職人の高齢化と後継者不足が深刻という。竹中銅器の高辻武男・取締役部長は「20年後、30年後にも再び高岡の職人が像の修復を担うためには、業界全体で後継者の育成と技術の継承に努めていく必要がある」と話している。

（松原央）



平和祈念像＝長崎市の平和公園